

人権ほっと29年1月号

「学ぶことが楽しい」

大阪教育大学

特任教授 島善信

先日、ある中学校区の授業研究会に参加しました。

2年生の算数、九九の授業は、じゃんけんゲームで始まりました。いきなり教室中が大歓声です。3人から4人がひと組になって、立ったり座ったり、どの子も夢中になって楽しそうです。「今日の授業は」で、一転して全員がじつと先生を見つめます。ゲームで「カラダとココロとアタマ」を柔らかくし、子どもたちを一気に算数の世界に導く見事な先生の手腕でした。

最初は前時のふりかえりで、3個ずつ4列に並んだミカンを数える課題です。「黒板に貼った図で説明できる人」との質問。ハイハイと次々に手が挙がります。当たった子は、前で黒板の図を示しながら自分の考えを説明します。全員がその説明をしっかりと聞いています。3個ずつまとめるとかたまりが4つできるので、 $3 \times 4 = 12$ と説明する子。4個、2個、6個

ずつと次々アイデアが出ます。

どの子も当てられると、にっこりとして小走りで前に行きます。同時に、他の子からは「あー」という声も聞こえます。考えついたことをみんなの前で説明するのが楽しい、嬉しいと感じる、だから当たらないと残念なのです。難しい算数の授業が楽しい学びの時間になっています。

「もうありませんか」の問いに、最後列のある子がハイと元気よく手を挙げ指名されました。喜び勇んで黒板まで駆け寄ってからモジモジ。どう考えたのとの先生の助言にも答えられません。一瞬の沈黙と緊張。「出てくる途中で忘れたんやね」教室中に、優しい空気が流れました。

これからの授業は、子どもが自分の力で考えて、それをみんなで伝え合う、励まし合って楽しく学ぶことが大切だと指摘されています。小学校2年生でここまでできることを、まぎまぎと見せつけられた瞬間でした。